生活としての釣り、スポーツとしての釣り
～スポーツ文化複合の概念を用いて～

Fishing as a work, fishing as a sport.
-Analysis by the concept of the ‘sports culture complex’-

1K08B212-4　森 康博
主査 石井 昌幸 先生　　副査 作野 誠一 先生

【はじめに】

人間と密接に関わる「釣り」。我々は主に、生活と娯楽という､相反する目的のために釣りをおこなってきた。

本研究は、この二面性を持った釣り文化を双方の立場から考察し、その特徴を比較することによって、人間における「釣り」の意義を明らかにするものである。

そこで本論文では、「技術」･「制度」･「精神」というスポーツ文化複合の概念を用いることによって、釣り文化を分析する。

【第一章】

第一章では、「技術」という観点からそれぞれ釣りの歴史について考察した。釣りは旧石器時代からおこなわれ初め､人類の進化と共にその技術を向上させていった。

そうした歴史をふまえて、生活のための釣りでは、より大きな獲物を捕る可能性の高い「確実性」が重要視されていた。一方で、娯楽における釣りはそのような確実性よりも、むしろ「自らのテクニック」を重視する傾向が見られた。それらの特徴の違いは、生活のための釣りが直接利益に結びつく行為であるのに対し、娯楽の釣りはあくまでも自らの余暇の利用に過ぎないことから来るものであった。

【第二章】

第二章では､「制度」という観点からそれぞれ釣りの歴史について考察した。乱獲や漁場争いを避けるために組織された JF（漁業協同組合）が「細分化・差別化」を目的として制度化されたのに対して、IGFA（国際ゲーム・フィッシュ・アソシエーション）は、全体でルールを統一し、公平化を図ることによって可能性を広げようとする「広汎性」が特徴として強く表れた。同じ釣り組織でも、生活の場合は保守性を求め、娯楽になると逆に革新性を求めるようになるというそれぞれの異なる特徴が明らかになった。

しかしながら､「漁業権」という権利は、どちらに対しても共通な部分であり、その漁業権を通して、双方がそれぞれを支え合っているという興味深い特徴も明らかになった。

【第三章】

第三章では､「精神」という観点からそれぞれ釣りの歴史について考察した。生活における漁師が、釣りに対して「犠牲心」や「責任感」を持ち、それによる祈願や信仰が特徴的だったのに対し、娯楽における釣り人は自然に対する「牧歌的」な感情や、「フェア」、そして魚の大きさやファッションに見られる「自己表現」といった特徴があった。これらの背景には「余暇」と「生存」という真逆のキーワードが存在するのと同時に、それぞれの歴史から来る精神の違いも要因として明らかになった。

精神にそれぞれ違いが見られることで、釣りが人々の社会により深く根付されているということが分かった。

【第四章】

第四章では視点を変え、現在の釣りが社会に与える影響について問題意識を持って考察した。釣りは人間に恩恵をもたらしたが、同時に問題ももたらした。レジャー目的で国外から移植された外来魚は、娯楽として大きな役割を果たす一方、日本における川や湖の生態系を著しく乱し､自然を生活の基盤とする漁師にも打撃を与えた。

こうした問題を解決するために、新たな条例やルールが設けられはしたが、漁業関係者がレジャー営業をおこなうケースも多く、単に外来魚を駆逐することが問題解決に直結するわけでないというのが現状である。現代の釣りの完成には、まだまだ多くの議論が必要だろう。

【おわりに】

全章を通して、生活と娯楽という二つの釣りは、同じ行為をおこなっていながらも、「技術」･「制度」･「精神」を通して見た時、そこにはそれぞれ特徴の差異があることが明らかになった。同じ行為でもそれぞれ多様な特徴を持ちうるということは、それだけ人々と密接に寄り添ったゆえに生まれた変化であり、釣りのこうした分岐こそ、人間社会を形成する文化そのものであると結論づけることができる。釣りは人間にとって無くてはならないものであったのである。